

良寛だより

第188号

令和7年4月1日

編集発行 全国良寛会

〒951-8112 新潟市中央区南浜通2
北方文化博物館新潟分館内
(振替00620-0-1545)

お問い合わせ先 理事 本間 明

印刷所 株式会社ウィザップ



「三老三笑」 富川潤一・画

山中で木こりの老人、僧侶（良寛）、漁師の三人が楽しく談笑している絵。
江戸時代、身分制度があった中、良寛は分け隔てなく、誰とでも接していた。
(出雲崎町・良寛記念館蔵)

とみかわ・じゅんいち (1907～1995年)

新潟県長岡市（栃尾）生まれ 洋画・日本画を使い分けたが良寛を描くときは水彩画を用いた 富川家と良寛の山本家は外戚関係にあり祖母から良寛の逸話を聞き身近に感じていた

リレーエッセー

良寛つれづれ37

良寛さんのこと

磯田 達伸

(新潟県長岡市長)

長岡市には、全国に誇る多くの先人がいます。

その中でも、良寛は別格です。司馬遼太郎の『峠』の主人公でもある幕末の長岡藩家老・河井継之助は、越後の三傑として、「上杉謙信、酒吞童子、良寛」を挙げたと伝えられています。良寛と親交があった風雅をたしなむ父、代右衛門の影響があったのかもしれないませんが、さすがは継之助と思われる話です。

わたしなどは、良寛さんほど偉い人はいないと思い、そのように公言しながらも、いまだに「良寛さんの本当の偉さ」を理解できないでいます。

詩文や書では、日本最高の文人（知識人）である一方で、師国仙から印可を受け、「大愚」と称された良寛さん。本当に奥の深い人物です。

さて令和八（二〇二六）年は、文政十（一八二七）年に良寛と貞心尼が島崎（長岡市）で出会ってから二百年を迎えます。貞心尼との出会いによって、良寛の生涯に一層の深みと彩りが加わりました。この機会に、もっともっと大勢の人たちから、良寛のことを知ってもらえるよう、さまざまな取り組みを進めてまいります。

「良寛だより」一八八号（令和七年四月一日） 目次

●表紙絵「三老三笑」 富川潤一・画	
●リレーエッセー(37)	
●良寛遺墨鑑賞(三十六)「和歌・漢詩『をやまだの』」	磯田 達伸 : 1
●各地良寛会だより②⑥ 御風会の巻	小島 正芳 : 2
●全国良寛会南魚沼大会 参加申し込みとご案内 大会実行委員会	榎 正喜 : 3
●カナダ・ケベック州で書道講座 「良寛さまを学ぶ」	寺本 小鳳 : 4、5、6
●良寛さんと高野山①	器楽堂ゆう子 : 7
●「無漏」の書に思う	中川 哲昌 : 8
●私の中の良寛④	丸岡 稔 : 9
●「評伝 良寛」阿部龍一を読んで(上)	齋藤 達也 : 10
●相馬御風の良寛(三十六)「フィッシュヤーの良寛研究」	金子善八郎 : 11
●良寛を今に伝えた人びと⑩ 西郡久吾	本間 明 : 12
●私の好きな良寛さん	小野塚純夫 : 13
●会報紹介、トビックス、新入会員紹介、目次、追悼	田村 優子 : 14、15
●良寛を訪ねて③⑦ 終焉の地島崎 木村家①	吉井 清一 : 16